

文脈に対する柔軟な感受性の促進による利他的行動の関係フレーム反応の変化

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害・行動分析クラスター
ZHANG Pin

文脈に対する柔軟な感受性は、その文脈に存在する様々な要素に気づくことができるようになると言われている。臨床心理の面接において、文脈に対する柔軟な感受性を高めることやとりがよく使われている。特に行動分析学では、感受性が重要であることが示唆されており、感受性の変化がもたらされる影響を関係フレーム理論で説明している。本研究は、中国人と日本人を対象に、**Implicit Relational Assessment Procedure (IRAP)**を用いて、利他的行動に対する感受性を高めるやりとりによる関係フレーム反応と心理的柔軟性 (AAQ-II) の変化を検討した。そのため、国(中国・日本)×群(統制群・介入群)×時期(前・後)デザインを用いて、感受性を高めるやりとりの効果を検討した。参加者は合計45名であった。得られたデータを介入前の IRAP score と AAQ-II の得点を統制した共分散分析を用いて検討した。その結果、日本介入群において、感受性の介入によって、「私」に関する関係フレーム反応が利他的に有意に偏った ($F(1, 32)=24.007, p<.01$)。AAQ に関して、中国では、感受性の介入によって、心理的柔軟性が有意に向上したことが示された ($F(1, 50)=12.276, p<.01$)。

利他的行動に対する感受性を高めるやりとりは、関係フレーム反応の変化を起こすことができ、その結果から、臨床場面における感受性を高めるやりとりは、効果的であることがいえる。また、心理的柔軟性を高める効果もある。感受性を高めるやりとりは、臨床心理の面接において、効果のある手段であると考えられた。